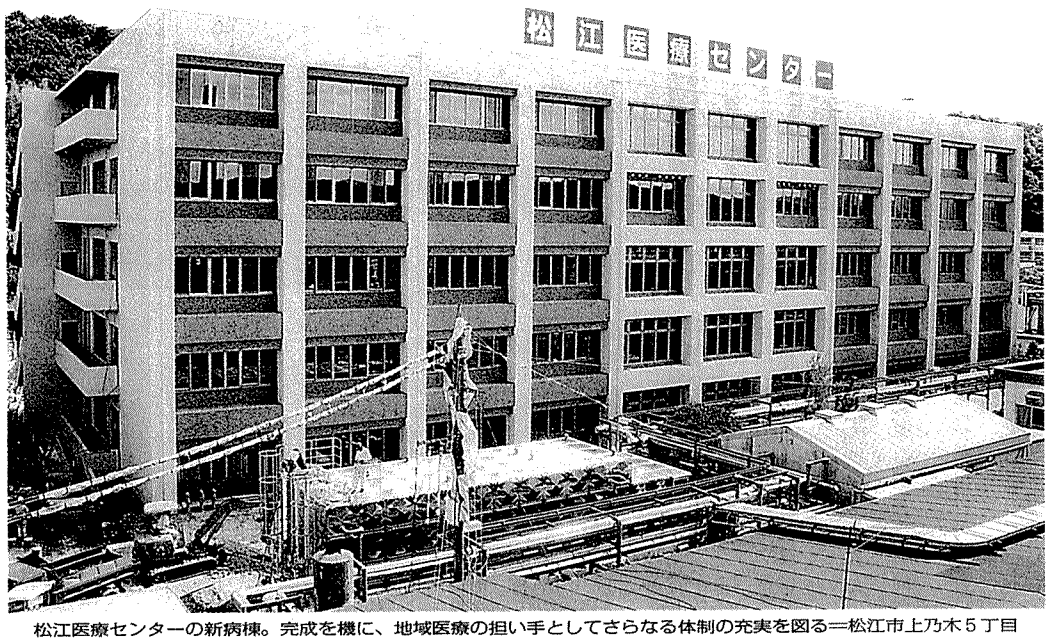
地域医療の中核病院へ

国立病院機構 松江医療センター新病棟完成

専門4分野の体制強化

山陰の呼吸器医療と、筋ジストロフィーなどの障害者医療を支える独立行政法人国立病院機構「松江医療センター」（松江市上乃木5丁目）の新病棟が完成した。国立から独立行政法人化して5年、地域医療の拠点を目指し、体制の充実など改革を進めてきた。今年4月、新病棟開設に合わせて病院名を「松江病院」から改め、新たなスタートを切った同センターの取り組みを紹介する。



松江医療センターの新病棟。完成を機に、地域医療の担い手としてさらなる体制の充実を図る＝松江市上乃木5丁目

快適さ向上

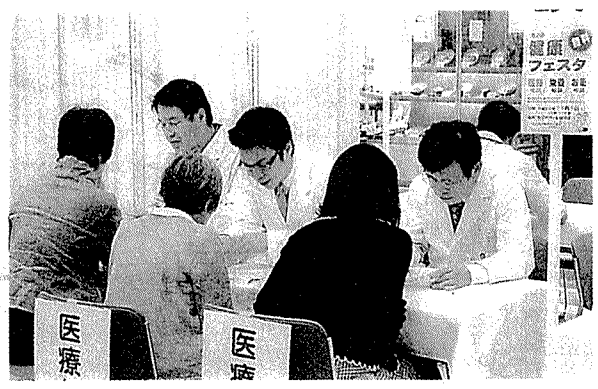
松江医療センターは国策としての結核治療を担っていた国立療養所松江病院と国立島根療養所が統合し、1971年に設立された「国立療養所松江病院」が前身。現在は県内の結核医療の中心的機関で、国指定の呼吸器疾患、神経・筋疾患、重症心身障害児（者）の専門医療施設という役割を持つ。

その建物は、ほとんどが統合当時に建設されたもので、特に8つの病棟（354床）は老朽化、狭隘（きょうあい）化が進み、機能面の不備、アメニティー（快適さ）の向上が課題だった。

昨年10月に着工、19億円をかけてこのほど完成した新病棟は、鉄筋コンクリート5階建て、8534㎡の290床。99年に増改築した神経難病病棟（50床）をのぞく7病棟を集約した。

1―3階（180床）は慢性期障害者病棟。重症心身障害児（者）、筋ジストロフィー患者、筋緩和ケアチームを中心に、ターミナル期の患者への医療を充実させる。

4、5階は急性期一般医療（呼吸器）の病棟。肺がんや肺気腫、結核患者などを受け入れる。見晴らしの良い最上階の5階には、緩和ケア病室を設け、新たに立ち上げた委縮性側索硬化症（ALS）などの神経難病患者で長期療養が必要な人の生活の場として、医療と福祉の両面から支える。



住民に親しまれる病院づくりを目指し、地域のスーパーマーケットで行った無料の健康相談。医師らが出掛け、買い物客に健康アドバイスをした（資料）

松江医療センターの4本柱

職員も充実

結核医療からスタートした同センターは、結核患者の減少に伴い、国策の下で医療の幅を広げてきた。04年の独法化を機に、医療活動の柱を「地域医療」としての呼吸器、「政策医療」としての神経難病、筋ジストロフィー医療、重症心身障害医療の4本柱に明確化。特色ある病院づくりを進めてきた。

05年には呼吸器病センターを設置。現在、呼吸器内科8人、同外科5人（うち非常勤1人）の県内最多の専門医が、外来、手術、24時間の救急外来に対応している。

県の拠点病院に指定されている神経難病医療、山陰、中国地方の拠点的役割を担う筋ジストロフィー医療、県内でも数少ない受け皿として機能する重症心身障害児（者）への医療では、課外活動など患者の生活の質の向上、在宅で療養する患者と家族の支援もする。

今春、作業療法士、理学療法士各2人、言語聴覚士1人を増員して10人体制にし、リハビリテーションの上位基準を取得、訓練部門も充実した。

積極的に院外へ

医療体制の充実に加え、地域の医療機関との連携、住民に親しまれる病院づくりにも力を入れる。

呼吸器科では毎月、松江圏域の開業医を対象に同センターの専門医が講師を務める学習会「肺疾患懇話会」を開催。07年からは地元医師会との交流会を年1回開いている。昨年8月に配置した専従の地域連携スタッフが地域の開業医を歩き、顔の見える「病診連携」を進め、紹介率アップにつながっている。

市民対象の公開講座「肺がんフォーラム」は今年4回目。医師が各市町村などを訪ね、講演活動を行うほか、看護師や医師がスーパーマーケットなどに出向き、買い物客に骨密度や血圧測定を行う「健康フェア」も続けている。

次の5年間では、外来・管理棟の新築、電子カルテ導入も視野に。地域の中核病院として、さらなる医療体制の充実が期待される。

徳島武院長インタビュー

病診連携の拠点目指す

開かれた施設へ努力

新病棟開設を契機とした今後の病院づくりを徳島武院長に語ってもらった。

◇ ◆ ◇

―新病棟完成への思いをお聞かせください。

「新病棟開設は、地域の医療拠点としての新たなスタートと考えています。2004年、国の一機関から独立行政法人となり、独自の病院づくりに取り組んできました。今春、5年間の第1期中期計画が終わって第2期に入り、新病棟建設に合わせて病院名も松江病院から松江医療センターに改称しました。この機に当院の存在を市民、県民、地域の医療機関の皆さんにあらためてアピールし、職員一人一人のさらなる意識改革のきっかけにしたいと思いました」

―この5年、どんな病院づくりに取り組んでこられたのでしょうか。

「国の指示で医療に取り組んだ国立時代から独法化し、自分たちの強み、地域医療で担える役割は何かをあらためて考え、呼吸器、神経難病、筋ジストロフィー、重症心身障害医療の4本柱に特化しました。呼吸器は地域医療、残り3つは当院でしか担えない政策医療です。この4つのさらなる強化に取り組みました」

―具体的には。

「例えば呼吸器内科は昨年1人増員し、医師8人体制にしました。手術を担う呼吸器外科は5人。呼吸器でこれだけの専門医がいるのは近隣で はありません。患者の受け入れはもちろん、環境が整ったことで、ゆっくり自分の医療、研究をしたいという医師からの問い合わせもあります。特色ある病院づくりを目指そうという方針です。これも得意分野に特化したからできることだと思います」

―特徴を打ち出すと同時に、ほかの医療機関との連携も進めておられますね。

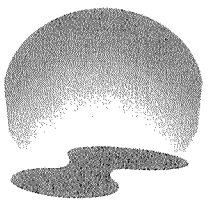
「この10年来、毎月、地域の開業医の皆さんとの学習会を開き、一昨年からは地元医師会との交流会も始め、顔の見える関係作りに努めています。昨夏には専従の地域医療連携スタッフも配置しました。厳しい情勢の中、互いに対抗するのではなく、それぞれの強みを生かした連携が必要です。呼吸器と障害者医療という特徴を生かし、地域の拠点として役割を担えるよう、さらにアピールしていきたいと思います」

「新病棟開設を地域の医療拠点としての新たなスタートにしたい」と話す徳島武院長

「住民の皆さんに対しては、残念ながら『結核の病院』のイメージから脱しきれていません。地域の講演会や勉強会も依頼があればどんどん出掛けています。近隣の自治会の皆さんには、講演可能な内容のリストとともに案内していますが、まだまだ敷居が高いのか、実は依頼はあまりありません。もっと気軽に声を掛けていただけるよう、親しまれる病院づくりに努力したいですね」

―今後の目標は。

「この5年間は黒字経営で来ることができました。次の5年は電子カルテ導入、外来・管理棟の新築を目指し、また職員と一丸となって努力したいと思います。これまで患者のために頑張れ、と職員に言ってきましたが、一方で職員が疲弊した面もありました。医師は増えましたが看護師は不足しています。今後は患者にはもちろん、職員にも優しい病院づくりを進めたいと思います」



独立行政法人 国立病院機構

松江医療センター

新病棟完成

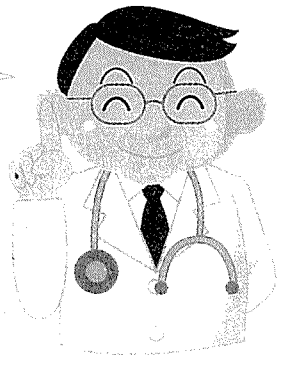
新病棟完成見学会 7月26日(日) 午後1時半～3時半

新しくなった病棟を地域住民の皆さまにご覧いただく見学会を開きます。ぜひお出かけください。

同時開催 **肺年齢 & 血管年齢 無料チェック**
健康は自分の体を知ることから。気軽にご参加ください。

肺年齢とは？
肺の働き（肺機能）を分かりやすく表す指標。自分の肺が年齢相応の働きをしているかが一目で分かる検査です。

血管年齢とは？
両手・両足の血圧と心電図を測定し、血管の硬さや詰まり具合を調べ、血管の状態を見るものです。



新病棟（290床）

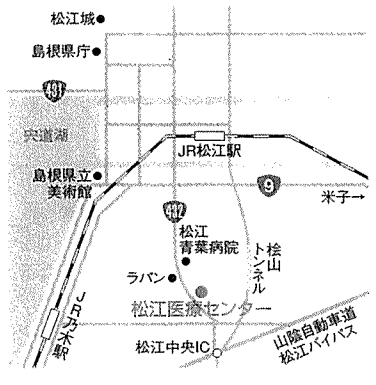
5階病棟	内科・外科・緩和ケア（50床）
4階病棟	内科・結核（60床）
3階病棟	重症心身障害（60床）
2階病棟	筋ジストロフィー・重症心身障害（60床）
1階病棟	筋ジストロフィー・神経難病（60床）

既存の神経難病病棟（50床）

合計 340床

＊松江医療センターの主な歩み＊

明治41年10月	松江衛戍病院創設
昭和14年12月	国立島根療養所が傷痍軍人療養所として設立
昭和28年 4月	松江衛戍病院が結核療養所「国立療養所松江病院」に転換。結核患者が減少し始め昭和30年代半ばから小児医療施設としての整備を開始。
昭和46年11月	国立療養所松江病院と国立島根療養所が統合し「国立療養所松江病院」に。
昭和54年 4月	呼吸器外科標榜
平成10年 6月	島根県難病拠点病院に指定。
平成16年 4月	独立行政法人化し「独立行政法人国立病院機構松江病院」に。
平成17年 6月	呼吸器の専門病院として呼吸器病センターを立ち上げ。
平成21年 4月	病院名を「松江医療センター」に改称。



独立行政法人 国立病院機構
松江医療センター
松江市上乃木5丁目8番31号 電話（0852）21-6131（代）